

原野先生のこと

木之下 忠 敬

私が初めて原野先生と出会ったのは書物を通じてである。当時(1973年)まだ大学院修士課程の2年生であった時、大学院の講義に中世フランス文学の講義があり、松原秀一先生がその講義を担当されていた。修士1年の時に松原先生が使われたテキストは、Paul Studer, E.G.R. Waters : « Historical French Reader – Medieval Period » (Oxford, Clarendon Press, 1970) であり、これは中世フランス語・文学のアンソロジーであった。「Serment de Strasbourg」に始まり、「La Séquence de Sainte Eularie」, « La vie de Saint Alexis », « Chanson de Roland », « Le Voyage de Charlemagne à Jérusalem », « Chançon de Rainoart », « Roman de Thèbes », « Roman d'Énéas », « Lai des dous amanz », « Roman de Renart », « Roman d'Alexandre », « Raoul de Houdenc », « Le Roman de la rose », « Romance of Lancelot », « Du Vilain mire », Rustebeuf, « Aucassin et Nicolette », Froissart などを読んでいる。勿論、各作品数ページずつであるが。このアンソロジーは各作品を数ページずつ読みながら同時に中世フランス文学史・フランス語史の勉強にもなるよう編纂されているものである。この中にあった「Roman de Renart」を修士2年の時の講義で松原先生が選ばれたのだが、その時テキストとして使用されたのが、「Le Roman de Renart, Branche IX, éditée d'après les manuscrits C et M par Noboru Harano, ouvrage publié avec le concours du Ministère Nationale du Japon, Librairie Bunkahyoron, Hiroshima, 1972」であった。この書のもとになったのは、その序文にも書かれているように、1970年に原野先生がパリ・ソルボンヌ大学に提出された学位論文「Édition critique de la branche de Brun et de Lietart du Roman de Renart, d'après le manuscrit 1579 de la Bibliothèque Nationale (fonds français) et le manuscrit de Turin」である。これは、R.-L. Wagner 教授, C. Régnier 教授, G. Moignet 教授の審査のもとに学位を授与されたものである。

松原先生のもとで中世文学を学んでいる頃の私は、将来の自分の研究分野

として、中世フランス文学を選ぶか、近現代フランス小説を選ぶかまだ迷っていた頃であった。中世に魅かれたのは、Guy Raynaud de Lage : « Introduction à l'Ancien français », Lucien Foulet : « Petite Syntaxe de l'ancien français » などの明快な説明に心魅かれたのと、Ferdinand de Saussure, Émile Benveniste などに興味があると同時に、「内的独白」や所謂「意識の流れ」の手法を用いた作家、ヴァージニア・ウルフ、ジェイムズ・ジョイス、プルーストなどにも興味があったので、19世紀後半から20世紀前半にかけてのヨーロッパ文学の動向に心を惹かれ、それがいつのまにか「自由間接話法」にも関心を持つようになっていた。一方、フランス中世文学に関しては、原野先生のテキストを読むかたわら、『トリスタンとイゾー』、『パトラン先生』、『フランスデカメロン（新百物語）』などを自分で読むなどしているうちに、中世文学にも既に「自由間接話法」が存在していることなどにも気づいていた。

あとでわかったことだが、松原先生が、この原野先生のテキストを講義のテキストとして採用されたのは、パリで既に原野先生と松原先生がお知り合いになられていたからであり、当時留学中であった原野先生がたや松原先生が御一緒に勉強会を開かれていたこともその理由のひとつであろう。また、松原先生が、原野先生のエディションクリティックの素晴らしさとその重要性を我々学生に知らせたかったからであろうし、所謂学問というものの面白さをも同時に教えたかったからであろうと思われる。勿論そういう事情は当時学生であった私にはまったくわからないことであった。私としてはかなり真面目に中世フランス語・中世文学を勉強していたのだが、そのせいか、松原先生は私が先生と同じく中世文学の分野に進むことを密かに期待されていたかも知れない。残念ながら、先生のその期待に応えることには結果的になくなってしまった。私の興味が現代フランス言語学と文学との関係、特にフロベールとその文体論的研究の方向に向いてしまったからである。

フランスでの留学期間を終えて日本に戻り、どうにか大学に職を得た所が大分大学であった。ここで2年ほど過ごした後、岡山大学文学部のフランス語学講座の公募に応じ、配置換えが決まった。この転勤のことが、松原先生から原野先生へ多分連絡が行っていたのであろうか、岡山大学へ赴任したあとの初めての中国・四国支部会での発表のあとで、原野先生と親しくお話をする機会を

得ることになった。その後の先生との長いご厚誼をいただくはじめての機会で、1986年のことだったと記憶している。この時初めて、例の『狐物語』とその校定本の著者「原野昇」氏とが私にとって一致したわけで、不思議なご縁だと思っている。

さて、その原野先生の『狐物語』の校定本だが、今開いてみると、あちらこちらに書き込みがあり懐かしいものである。Bibliographieの項をみると、Mario Roquesとか、Gaston Parisなどのところに下線が引いてあり、Classiques français du moyen âge などという懐かしいシリーズの名前が目に飛び込んでくる。

Uns prestres de la Croiz en Brie,
Qui Diex puist doner bone vie
A ce que plus li atalente,
A mis son penser et s'entente
A fere une novele branche
De Renart qui tant set de guenche.

という書き出しで始まる「C'est de l'ours et du Renard et du villain Lietard」のところには「Diex : x - us, cas sujet », « puist : pouvoir - subjonctif », « atalente : plaire, convenir à », « fere : faire », « guenche : action d'obliger, d'esquiver, tromperie, ruse »などと書き込みがあり四半世紀前の頃が懐かしく思い出される。51行目の「Rougieus, trop estes alenti.」の所には「5/28」と日付がはいっており、1973年5月28日まで講義開始から約2ヶ月で51行進んだことがわかる。中世フランス語を学び始めて2年目の4月から5月であるから、これは結構早いペースなのではなかろうか。こうして、松原先生から中世フランス語を教えられた我々学生は、1974年度1月最後の講義の時には、1255行目まで進んで講義を終えている。1年30回の講義だとすると、平均して1回の講義で約42行くらいずつ進んでいることになる。中世フランス語に残る名詞の格の問題や、現代フランス語との形態論的差異、意味論的差異などを考慮すれば、講義の進度としてはまあ普通か、少し早いくらいであろう。ただし、現在の学生諸君の学力程度を考えれば、かなり早い進度かも知れない。原野先生の校定本には当然のことであ

るが、「Notes critiques et explicatives」(p.171-p.215) と「Glossaire」(p.216-p.250) が付いており、ここにも私が下線を付したりして、だいたい勉強したあとがみてとれる。この頃私たちが使っていた中世フランス語辞典は簡便な「Dictionnaire du l'ancien français」(Larousse) であったと思うが、時々 Wartburg, Meyer-Lübke, Tobler-Lommatzsch, Godefroy などの辞書も引いたと思う。ただ、原野先生の校定本の文法的注と語彙の説明が詳しかったので、殆どこれらの注と説明に頼っていたような気がする。

岡山大学の語学講座への転勤後、講座での講義にこの院生時代の中世フランス語の勉強が役立った事は言うまでもない。今ではなくなってしまったが、かつては岡山大学文学部には全国的にも珍しく、文学講座・語学講座の2講座が存在したのである。本来は私は文学研究が主であるから、文学講座に属すべきなのだが、公募があったのは語学講座であった。公募条件に自分がふさわしいかどうか迷ったが、「自由間接話法」という文学、語学両方に跨った領域を専門にしていたので、そのことを付記して公募に応募したのであったが、岡山へ赴任してからはやはり語学分野の講義を持たざるを得なかったのである。何が幸いするかわからないもので、岡山に来てからまた中世フランス語および中世フランス文学の講義をするために勉強することになったのだが、かつて院生時代に松原先生に教えていただいたことがここで役立つことになったのである。クレチャン・ド・トロワやラブレー、マリー・ド・フランス、「ヘプタメロン」などを次から次へと読んでいくことになったが、それが同時に「自由間接話法」の通時的検証とも繋がっていったのは自分にとって幸いであった。また、ラテン語の講義も担当したので、Alfred Ernout et François Thomas: « Syntaxe Latine » (Klincksieck, 1972, 1^{re} édition 1951) なども読み、ラテン語にも既に「自由間接話法」が存在することなども知ることが出来た。松原先生に中世フランス語を習い、その松原先生とお知り合いの原野先生と面識を得た私は、お二人の研究者としてのご交流関係を次第に知るうちに、中世からもう一度やりなおして、Marguerite Lips が「Style indirect libre」(Payot, 1926) でなしきれなかったことを自分でやってやろうと思うようになったのである。因みに、私がこのリップスの著作を読んだのは留学中、ソルボンヌの図書館である。当時のコピー機は性能が劣悪であったから、50センチ硬貨を1枚ずつ投入しながらこのリップ

スの著作を全部コピーしたのだが、折角コピーして作成したこの1部は紙全体が青みを帯びて駄目になってしまった。大分大学に赴任した時、松原先生からこのリップスの著作をお借りし（多分、先生の父君の蔵書であった）新しくコピーを作成したのが、今でも手元に残っている。さて、このリップスの著作に啓発されて抱いた私の夢は、残念ながら未だに果たしきれないでいるが、まだ時間はあるだろう。

その後、原野先生から、『狐物語の世界』（東京書籍、1988）、『狐物語』（白水社、1994）、『狐物語』（岩波文庫、2002）、『中世ヨーロッパの時空間移動』（溪水社、2004）、『フランス中世の文学』（広島大学出版会、2005）などの御著書を頂いたりして今日に至っているが、先生の御著書がこれだけでないのは勿論である。私は、先生から、『狐物語』各枝篇についての浩瀚な著作、コンコルダンスを見せて頂いた時には驚いたものである。先生の御業績は他のところで紹介されていると思うのでそちらを参照していただくことにして、ここでは、『狐物語』研究における先生の御業績について少し話してみたい。

『狐物語』には、 α 群写本、 β 群写本、 γ 群写本が存在することは良く知られている。 α 群写本は Ernest Martin によって、 β 群写本は Mario Roques によって既に立派な校定本が刊行済みであった。そこで原野・鈴木・福本先生は γ 群写本を底本とした校定本の完成をめざされたのである。先に言及したテキスト、私達が学生時代に読んだ『狐物語』は、この γ 群写本の一部に属するものである。1983年、1985年に二巻本としてフランス図書から出版された「Le Roman de Renart, édité d'après les manuscrits C et M」は原野・鈴木・福本先生方の研究の見事な成果である。この成果は当時 Université de Paris III - La Sorbonne Nouvelle の教授であった Jean Dufournet 氏からもすぐに評価され、彼が GF-Flammarion から出版した「Le Roman de Renart」（Tome 1, Tome 2, 1985）の Bibliographie にも早速取り上げられている（Tome 2, p.493）。原野先生方はこの見事な γ 群写本の校定本をもとに、今度は日本語訳を出版されるのである。それが、先にあげた『狐物語』（白水社版、岩波文庫版）である。その日本語訳が如何に優れたものであるかを少し見てみよう。原文を引用し、その後日本語訳を提示する。

« Ahi !, dist il, dame Hersent,
 Conchié sonmes laidement. »
 Ele saut sus conme desvee
 Toute nue et eschevelee.
 « Diex, dist ele, qui a ce fait ?
 Ci a estout donmage et lait. »
 Ne le sevent sor qui souchier,
 N'a entre eus .II. que coroucier.
 Conme ce vint après mengier,
 Renart s'en vint esbanoier
 En la meson mout lieement,
 Son oncle trove mout dolent.
 « Oncle, dist il, que avez vòs ?
 Pensis vos voi et corouços.
 — Biau niez, dist il, bien sai de qoi.
 Perdu sont mi bacon tuit troi,
 S'en ai au cuer dolor et ire.
 - Oncle, dist il, or devez dire.
 Se vos dites a val la rue
 Que cele char aiez perdue,
 Puis ne vos en rovera mie
 Parent ne ami ne amie.
 — Biax niez, fet il, por voir te di,
 Perdu les ai, ce poise mi. »
 Renart respont : « Ainz n'oï tal :
 Tiex se plaint n'a mie de mal.
 Bien sai qu'en sauf les avez mis
 Por vos parenz, por vos amis.
 — Di va, fet il, es tu gabierre ?
 Foi que tu doiz l'ame ton pere,

Et ne croiz tu ce que je di ?

— Tout tens dites, dist Renart, si.

— Renart, ce dist dame Hersens,

Je cuit vos estes fors du sens.

Se nos nes eüssons perduz,

Ja escondit n'en fust renduz.

「おーい、エルサン、まんまとやられてしまった」。彼女は素っ裸のまま髪を振り乱してとび起きて、気も動顛して言いました、「まあ、いったい誰の仕業でしょう、こんなひどい事をするなんて」。二人は誰を恨んでいいか分からず、腹が立つばかり。

ルナールはたんまり食べると、上機嫌でイザングランの家に遊びに来ました。ひどく不機嫌な様子の伯父を見て、「伯父さん、どうしたの、えらく考え込んで、怒っているようだけど」。「よくぞ聞いてくれた。実はな、燻製肉を三本ともやられてしまって、頭に来ているところなんだ」。「伯父さん、それじゃ表へ出て、肉を取られた、とみんなに言わなくちゃ。そうしたら、親戚の者も友達も、誰も分けてくれって言わなくなるだろうからね」。「嘘じゃないんだ、本当に盗まれたって言ってるんだ」。「嘘言ってらあ、大騒ぎする奴にかぎって痛い所なんかないんだ。親戚の者や友達に分けてやるまいと思って隠してるってことぐらい、ちゃんと分かってるよ」。「俺をからかう気か。お前の親父の魂にかけても、わしの言うことは信じないのか」。「あくまでも嘘を通すおつもりなんですわね」。

その時エルサンが口をはさんで、「ルナールさん、あんたは頭がどうかしてるんですよ。もしも盗まれてないんだったら、言い訳なんかしませんよ」。
(岩波文庫版, 2002)

この日本語訳に感心しない者はいないであろう。見事な日本語である。訳本だけで読んでも、『狐物語』の面白さが生き生きと伝わってくる。この『狐物語』を読んで中世フランス文学の面白さに目覚めた者は数多くいるであろう。私のまわりにも、この日本語訳に魅せられた者が幾人となく存在する。原著の校定

本の完成、刊行という業績に加えて、この訳業にはただただ感服する以外にない。白水社版(1994)の訳と岩波文庫版(2002)の訳を比較すればわかることだが、訳者たちが不断的な努力を重ねていることもよくわかる。白水社版で、「大騒ぎする者は痛い所なんかないんだ」、「もしも盗まれてないんだったら、断りなんかしませんよ」となっていた部分が、岩波文庫版では、「大騒ぎする奴にかぎって痛い所なんかないんだ」、「もしも盗まれてないんだったら、言い訳なんかしませんよ」と一層明快な日本語になっている。原野先生の御業績には、このように、中世フランス文学を分かりやすい美しい日本語で多くの日本人に紹介されたという点もあるのである。原野先生は研究者として見事な成果をあげられ、これからも一層謹厳にして厳格な研究生生活をおくられ、その成果を今後とも発表しつづけられることであろう。

先生には、私が岡山に赴任した数年後に集中講義で岡山大学においていただいたことがあり、また、数年前、多分2001年だったと思うが、今度は私が広島大学文学部へ集中講義に呼んでいただいたことがある。いづれの時にも親しくお話を伺うことができ、また楽しくお酒をいただいた思い出がある。先生のことを語る時、先生が研究者として素晴らしい業績をあげられたことだけではなく、もっと優れた一面として、人間的な魅力に溢れた教育者であるということも忘れてはなるまい。集中講義で広島にお邪魔した時、最終日、私の講義が終わった後、参加した学生諸君すべてを集めて、皆でティータイムを開いて、歓談したことが思い出される。この時の先生の学生に対する慈愛に満ちたお話とお顔とを今もって忘れることが出来ない。このような先生の姿勢は、学会の中国・四国支部会などでも変わることは全くなかった。煩わしいことの多かったと思われる支部運営に関しても常に真摯な姿勢を崩されることのない方であった。我々後進の者はこうした先生の人間としてのありようを忘れてはならないであろう。

現在、大学が様々な形で改編され、フランス語学・文学を学ぶ学生が減少しつつあるなかで、フランス文学を学ぶこと、いや、フランス文学だけでなく「文学」を学ぶことの意味が理解されないような状況が生まれて来ているような気がする。このような時、研究者・教育者としてのありようそのものが問われているのではないだろうか。学問(私はこの言葉はあまり好きではないのだが)は

その実践者にとって、自らの体験が血肉となって「身に付いたもの」になっている必要があると思う。つまり、このような時代状況にあっては、大学に身をおく我々は、結果的に研究者・教育者としての私達の「人間性」そのものが問われてくると思うのであるがどうであろうか。

かつて日本のフランス文学研究界の良心、リベラルな思想家として戦前、戦後の研究界を代表していたかに見えるある高名な先生がおられた。私はある時、この高名な先生が、戦前、昭和17年に設立された日本文学報國會にその名を連ね、外国文学部会の幹事の一人であったことを知った。日本文学報國會はその定款の「目的及事業」に次のように謳っている。「第三條 本會ハ全日本文學者ノ總力ヲ結集シテ、皇國ノ傳統ト理想トヲ顯現スル日本文學ヲ確立シ、皇道文化ノ宣揚ニ翼賛スルヲ以テ目的トス 第四條 一 皇國文學者トシテノ世界觀ノ確立 六 文學ヲ通ジテ為ス國策宣傳」(『日本文学報國會會員名簿』、昭和18年版。新評論、1992年復刻版)。勿論、理事、参事、幹事などに他のご高名な先生方が並んでいるのだから、この高名の氏が参加を拒めなかったであろうことは理解できる。当時はすべてと言っていいほどの学究の徒が日本文学報國會から逃れることは不可能に近かったであろう。しかし、例えば当時、新興俳句運動を推進していた、平畑静塔、西東三鬼、秋元不死男(東京三)などが「京大俳句事件」(昭和15年—16年)で特高警察に逮捕される事件が起こるが(村山古郷著『昭和俳壇史』角川書店、昭和60年初版)、これら3人は当然この日本文学報國會には加わっていない。私に言わせれば、この組織には、参加したくても参加出来ない人、参加したくなくても参加せざるを得なかった人、積極的に参加した人、そして、もともと参加しようと思わなかった人がいたと思う。この高名な氏は第2の部類に入らるだろうと思われるが、その先生が、学徒出陣で死んでいった人たちについて、「私が遺書の中で一番いやなのは……」と自分の教え子の残した遺書を批判していることをどのくらいの人が知っているであろうか(「きけわだつみのこえ」第二集、岩波文庫、1988, p.369)。死地に赴いた自分の学生の文章の内容が「いやな」ものであるのならば、そこまでしか指導出来なかった教師とは一体何なのだろうか。戦前の帝国大学の教授、助教授の社会的地位は現在のそれとは比較にならないほど世間では大きな比重を占めていたものである。自らは安全な場所に身を置きながら、自分の教え子

が出陣して死んでいくことを止めることが出来なかった教師。その教え子が残した遺書に対し、内心忸怩たるものがあつたとしても、このような批判をすることが一体如何なる意味をもつのであろうか。このようなことを考える時、学問というものが、「身に付いた」ものになることが如何に重要なことであるか、私は思い知らされるのである。教えるということは同時に自らも教えられるということではないだろうか。教師は学生諸君と対するとき、お互い人間同士として相対することが必要なのではないだろうか。私は原野先生のことを思う時この気持ちを強くするのである。そして、先生の研究者として、教育者としてのお人柄に強く心を魅かれ、また先生の人間性を思う時、晴れ晴れとした気持ちになるのである。

岡山に来てから既に 20 年近くの年月が過ぎようとしているが、この間、原野先生の知遇を得て親しくお付き合いさせて頂くことが出来たのは、私にとってまことに幸せなことであつたと思う。先生が今後ともますますご壮健にあられ、一層の研究成果を発表し続けられることを願いつつ、この「記念論文集」の拙文の最後にラブラーの言葉を引用して終わりたいと思う。

Amis lecteurs, qui ce livre lisez,
Despouillez-vous de toute affection,
Et, le lisant, ne vous scandalisez :
Il ne contient mal ne infection.
Vray est qu'icy peu de perfection
Vous apprendrez, sinon en cas de rire ;
Aultre argument ne peut mon cueur élire,
Voyant le dueil qui vous mine et consomme.
Mieux est de ris que de larmes escripre,
Pour ce que rire est le propre de l'homme.
Vivez joyeuxlx.

(岡山大学文学部)